支部見聞録
From 東京

（左）都心を一望できる世界一の展望タワー
（下）浅草の夜空に溶け込む「雅」ライトアップ
CG 画像提供：東武鉄道㈱・東武タワースカイツリー㈱

東京スカイツリーが建つ町の昨日と明日

下町をひとつにつなぐ世界一の「樹」

自立式電波塔として高さ世界一。「東京スカイツリー」はすでに最高高さ634mに達し、隅田川を挟む浅草の対岸の地で完成に向けて着々と工事が進んでいる。周辺はかつて墨東の景勝地として知られた地。その面影に「昔」をしのびつつ、東京スカイツリーのありようとツリーが拓く「未来」に思いを馳せよう。

技術の粋を集めた世界一の塔

なんと圧倒的な存在感だろう。建設現場間近から見上げるスカイツリーは、鉄骨の太さもたくましく空へと伸びる。周辺には大勢の見物客。コンパクトカメラや携帯電話のカメラで撮影しようとする人は例外なく四苦八苦している。ツリーが大きすぎて一部しか画面に納まりきらないのだ。

2011（平成23）年3月18日に東京スカイツリーはついに最高高さ634mに到達。これまで日本一だった東京タワーの333mの倍近い高さになり、自立式電波塔として世界一になった。建設への歩みは、2011（平成23）年の地上デジタル放送への完全移行をにらんで始まった。都心に林立する200m級の高層ビルの影響を受けにくい、600m超のタワーからの送信が望まれたからだ。実はこの高さ、覚えやすい数字にしたいということで「634（むさし）」。武蔵の国（東京、埼玉、神奈川の一部）を望む電波塔ということだ。開発主体は東武鉄道、設計監理は東京タワーをはじめ数多くの塔を手がけてきた日建設計、施工は大林組。未曾有の高さゆえに地盤や高層の風など綿密な調査が行われ、工事にはさまざまな工法や新技術が導入されている。

面白いのは五重の塔と同じように、中心を貫く心柱上部を「おもり」として機能させて地震や風による揺れを抑える構造を採用していること。東京スカイツリーではまず中心に心柱用の空洞を抱く形で鉄骨を組み上げる工法をとっている。最上部のゲイン塔は、この空洞を利用してあらかじめ組み立て、上に引き上げて設置するというから驚きだ。鉄筋コンクリート製の心柱の建設は一番最後で、空洞内で特殊な装置を使い、上へ上へと積み上げるようにコンクリートを打設していくのだという。

足元は1辺約70mの三角形、上部は円形。底辺と高さの比は9倍以上で、名前通り空に伸びる大樹をイメージ。ツリーが建つ旧貨物ヤードを中心に、大きな樹の下に人々が集い、江戸文化が残る下町に新たな賑わいを作り出す場として再開発事業が進められている。オフィスや300もの店舗、水族館などを擁する東京スカイツリータウンが2012（平成24）年5月にはオープンの予定だ。

取材・撮影協力／東武タワースカイツリー㈱、向島百花園

隅田公園の池もスカイツリーを映す

向島百花園。6月はガクアジサイが美しい

下町の分断された時空をつなぐ

ツリーが建つ東武伊勢崎線「業平橋※」駅、4路線が乗り入れている「押上」駅エリアは、隅田川と荒川放水路を結ぶ北十間川のほとりにあり、北十間川からは竪川や横十間川などが連なってかつては東京の水運の中心地だった。1931（昭和6）年以前は東武伊勢崎線の起点は現在の浅草ではなくこの業平橋。戦後しばらくまで水運と鉄路をつなぐ輸送の要だったという。しかし、その後は隅田川の対岸にある東京きっての観光地浅草や2km南西にある国技館や江戸東京博物館といった江戸文化・下町文化の「顔」的名所の谷間にあって、あまり知られてはいなかった。

さらにさかのぼって歴史をひもとけば、江戸幕府の開府当初、墨東（隅田川の東）の一帯は葦原と農地が入り交じる江戸の郊外だったが、その後市街化が進行。ツリー建設地の南側の本所一帯には屋敷町が広がり、隅田川の河畔には徳川吉宗が植えさせたことから始まる桜並木が大江戸名物「墨堤の桜」として名を馳せた。また、北側の向島一帯は田園の趣き豊かな景勝地。特に有名だったのが江戸町人文化が花開いた文化文政期のはじめに日本橋で骨董商を営んでいた風流人、佐原鞠塢が開いた向島百花園だ。さまざまな植物を集めて四季の風情を楽しめるこの庭は大人気を集め、11代将軍家斉、12代家慶も来園したという。佐原鞠塢は交流広く、絵師の酒井抱一や谷文晁、狂歌師の大田南畝など当代一流の文化人がこの地に集い、焼きものの窯を築いたり、四季折々に風雅なイベントを仕掛けて文化の発信地にもなっていた。

ツリー建設地とこの百花園を結ぶコースは散策にはもってこいの距離。寺社も多く、百花園と周辺の長命寺や三囲神社などを訪ねる隅田川七福神巡りを楽しみに、タワー見物のついでに足を伸ばす観光客もいる。驚くのは百花園や寺社、一部道路沿いなどにも残されている石碑の多さと、刻まれた文字の素晴らしさだ。句碑であったり由来書であったり内容も書体もさまざまで見飽きない。勝海舟が青年時代に修業した禅寺弘福寺や三井家の守り神として崇敬を集めている三囲神社（三越との深い縁により、境内には閉店した池袋三越からライオン像が移設されている）、この周辺の総鎮守で牛の象を撫でると同じ部位の病が治るという「撫で牛」が有名な牛嶋神社、その隣の隅田公園は水戸徳川家の跡地で、庭園はその遺構を利用したもの。春には咲き誇る桜が美しい。

三囲神社のライオンと
牛嶋神社の「撫で牛」

牛嶋神社前からの眺望。この辺りは観光用人力車の定番コースにもなっている

ただ残念なことに、昔ながらの古い建物はほとんど残されておらず、町並みに風情は乏しい。このエリアには向島の花街（料亭街）もあるが、料亭名を掲げた建物は並んでいても見た目は素っ気ないし、コンクリート製の寺社もある。しかし、それも無理からぬこと。何しろこの一帯は明治の終わりからの100年間に、3度も壊滅した歴史を持っているのだから。

隅田河畔の本所、向島、深川、浅草など下町一帯は水害の多い場所で、特に1910（明治43）年の大洪水は未曾有のものだった。さらに1923（大正12）年には関東大震災、1945（昭和20）年3月9日には東京大空襲と続き、町は灰燼に帰した。その都度復興してきた町は、文化の香り豊かな歴史がありながら、その歴史はたび重なる水害や猛火で分断された。浅草寺などの歴史的遺構や名所が点在してはいても下町としてのまとまりや町全体を結ぶイメージは薄い。それがこの一帯の弱みだった。

東京スカイツリーは、下町が抱えてきたこのハンデを一気に覆す存在だ。634mのツリーはとにかくどこからでも見える。吾妻橋西詰めから眺めればジョッキをかたどったビール会社本社ビルとフラムドール（金の炎）に並び、向島百花園の萩のトンネルの上にも、浅草寺の境内からも、江戸東京博物館の大屋根の向こうにも見えて、圧倒的な存在感でこれまで分断されてきた下町の時空をひとつにつなぐ。2012（平成24）年2月には竣工し、5月には足もとの施設とあわせてオープン予定。下町の地に開かれる新しいページと豊かな可能性に熱い期待が集まっている。

※2012年5月に、現・名称「業平橋」駅から「とうきょうスカイツリー」駅に改称予定

別冊 FROMはウェブサイトへ
eふぁみり もあわせてご覧ください!
eふぁみり
http://jp.fujitsu.com/family/honbu/family/